

2026年2月15日（大齋節前主日、A年）

メッセージ

「復活を垣間見る」

（マタイによる福音書17: 1-9）

司祭ヨセフ太田信三

今日の旧約聖書では、神は雲の中からモーセに語りかけました。今日の福音では、同じ神が弟子たちに語りかけます。雲の中からの声を聞いた弟子たちは恐れに震えました。それは、神の声に対する恐れと同時に、イエスの受難予告を思い出したからかもしれません。なぜなら、今日の福音の直前の箇所は、イエスがご自分の受難と復活について弟子たちに話しをする場面だからです。イエスの受難と復活の予告を聞いた弟子たちは、イエスの「死」という恐るべき場面しか想像できませんでした。「復活」などには思い及ばなかったのです。しかし、イエスが知ってほしいのは「復活」なのです。なぜなら、イエスが「死んで復活する」ことに、神の人間への愛が完全に明らかにされるからです。だからこそイエスはここで、恐れ、うずくまる弟子たちに「近寄り」、「立ち上がりなさい」と語りかけます。

近い将来、イエスの死を目の当たりにし、恐怖のうちにうずくまる弟子たちは、ご復活のイエスによって起こされることとなります。であれば、今日の福音でイエスによって起こされた弟子たちは、イエスの死と復活によって「起こされる」ということを先取りして経験したこととなります。さらにこの場面のように、イエスから弟子たちに近づくというのは、ご復活のイエスが弟子たちに近づき（28:18）「世の終わりまで、あなたがたと共にいる。」と約束し、弟子たちを派遣する場面だけです。つまり今日の福音で、山の上で恐怖にうずくまる弟子たちに近づき、起こしたイエスは、これから山を下りて宣教という日常へと戻っていく弟子たちのことを、ご復活の栄光を垣間見せることによって励ましたのです。

「死」だけしか見えない弟子たちに、山の上でイエスは復活を垣間見せ、送り出します。こうして、山の上で主の栄光を目の当たりにしたからこそ、弟子たちはこれからの苦難を担うことができます。間もなく大齋節に入ります。私たちも、かすかに垣間見える復活の栄光を仰ぎ見ながら、大齋節の日々を歩んでまいりましょう。